

エルダーシスターの資格

～門倉葉子がエルダーとなった経緯について～

作：菅野たくみ

門倉葉子は、考えていた。

昨年度までは団結していた生徒会本部と委員会と運動部と文化部が予算折衝でひどく対立し、空中分解してしまったのだ。

昨年は、エルダーであった宮小路瑞穂さま、そして、その恋人であり同時に一昨年のエルダーであった十条紫苑さまのカリスマが幸いして、運動部、文化部とも、空前絶後の好成績を残した。同時に、風紀委員や図書委員等の委員会活動ですら、昨年は例を見ないほど活発化していた。

しかし、好成績を手放しに喜べるほど、生徒会の予算は潤沢ではない。

昨年まで、本部は活動成績を表向きの理由に予算の選択と集中を行っていた。それが、いつしか予算を集中した部は花形とされ、高い予算配分が名誉の証とされるに至ってしまった。

例えば、ここ数年間は、演劇部と陸上部に予算が集中している。そして、確かに毎年めざましい成績を上げている。

が、実際の理由は別のところにある。

これらの部は基本的にお金のかかるところ、なぜだか毎年、金銭的な問題を抱えているのだ。去年と今年は上岡由佳里さんと周防院奏さん。一昨年は前生徒会長の知子さま。こういった奨学金を受けざるを得ないほど金銭に窮し、同時に奨学金の支給資格を持つだけの実力を備える、恵泉の名だたるプレイヤーが名を連ねている。

要は、生徒会予算という富の再配分ルールが、昨年までの予

算削減の建前に足を引つ張られ、機能でなくなつたのだ。か
いって、真実を言えば将来にわたつて禍根を残す。

そんな中、生徒会を言いなりにすれば予算請求が全面的に通
るなどという妄言も漏れ聞こえてくる。先生から与えられた予
算でやりくりするしかないという前提条件をいちいち説明した
くとも、すでに聞いてくれる状況にない。

「はあ……」

黒幕の悪知恵で対処できないような、こういう大きな問題に
当たったとき、葉子はカリスマ性のない自分のモブ顔に不満を
覚える。もちろん、同じモブ顔でも、昨年バレー部のキャプテ
ンであった夏樹さま、科学部の部長であった睦実さまなど優秀
な方も希にいるが、葉子はいにくそちらの側ではない。

「ため息ばかりついていると、幸せが逃げちゃいますよ」

「幸せなんてどうでもいいから、この窮地をなんとかして」

可奈子の慰めに反発するほど、考え方が幼稚になっている。
行き詰まりの憤りは、簡単に解消できるものではない。

「今までと全く違う視点から問題を見ると、解決策が見えるか
もしれないわね。とりあえず、お茶でもいいか?」

「賛成」

君枝さんの提案に、葉子は反発を覚えたが、一理あるのは確
かなので、従うことにした。

その夜、葉子は大学院生の兄が自宅のパソコンでプレゼン

テーションソフトを操作しているところを目にした。

いつもなら、兄がパソコンを使っているときは、時計と台本
を見ながらスライドと台本を直す、慌てていて一種滑稽な姿を
見せる。しかし、今日の兄にはその悲壮感がない。

「葉子、俺が慌ててないのがそんなに不思議か?」

兄に笑われた。不覚。

「何を悩んでる? らしくないぞ、俺に見抜かれるあたり」

「生徒会の予算について、ちよつとね」

「それは手伝えそうにないな、心苦しいところだが」

「最初から期待してない。ところで、何してるの?」

「研究のアイデアを練ってるんだ。状況とかを簡単な図にま
とめると、別の視点からのアイデアが湧いてくるんだ」

「ふーん」

別の視点ね、と思ひながら葉子が画面を覗くと、「MAID
装置とデータ領域の仮想化」というタイトルが見えた。

「何それ?」

「ああ、ディスクアレイ——企業向けの外付けハードディスク
な——の研究だ。ユーザーにディスク容量を一旦割り当ててお
いて、あとで使わない分を自動的に取り返す仕組みがあるんだ
が、それを節電に活かせないかな、と。まあ、アイデアだけ
だと、速攻行き詰まるわけで。今までの考えを図にして、ま
まったところで一晩寝て、アイデアが浮かべばラッキー、く
らいの気分なわけ」

「なるほど。図ね……。ありがと、試してみる」

葉子は自室に引き返し、兄の真似をして、今までの情報をノートにまとめて図にしてみた。

自分なりにまとまったところで就寝。明日の朝に見えるかもしれないアイデアを期待することにする。

翌日の朝。起床すると、ふと一つの疑問が浮かび、それを昨日のノートに赤ペンで書き足す。

《予算と栄養の分離は可能？ その方法は？》

朝ご飯を食べている最中にふと思ったことを、書き足す。

《予算を一旦割り当てておいて、あとで取り返す方法は？》

シャワーを浴びる。この瞬間、世界は一人だけのもの。だが、いつものようにその感傷に浸るには、今日の葉子は少しだけ頭がさえずっていた。

シャワーからあがり、制服に着替える。制服に袖を通したその瞬間、門倉葉子は恵泉女学院生徒会長の肩書きに縛られ、また守られる。

《組織を見る以外に、組織に所属する個人を見ると？》

学院に向かう。二十分程度の通学路を歩くと、悩み事を解決するアイデアがよく浮かんでくる。人間は考える葦というのが、アイデアは歩いているときにひらめきやすいとの話もある。その意味では、葦より脚の字を当てた方が相応しい。

ほら。

完璧なアイデアが浮かんできた。

部活動・委員会予算を抑え、課外活動で活躍した個人に「課外活動奨励金」の予算を配分する。奨励金はエルダーに譲渡可能とする。このとき、エルダーの課外活動とは各種イベント、すなわち予算配分を除く生徒会本部業務そのものとなる。

奨励金を獲得する名誉と、それをあこがれのお姉さまに使っていただく榮譽。予算の獲得と返却をセットにした、二重の誉れによる予算の循環利用で、危険な橋を渡りきったその先で、生徒会本部の予算を確保する。

葉子は、このアイデアを形にすべく、早朝の誰もいない生徒会室へと歩みを急いだ。

生徒会室の扉を開けると、君枝さんと可奈子がいた。

「何、してるの？」

「えー、心配して来てあげたのに、ひどい」

葉子がもらった一言に、可奈子が食ってかかる。

その横で、君枝さんは静かに笑い、葉子に話しかけた。

「どうやら杞憂のようでした。会長、ご指示を」

「ありがと、君枝さん、可奈子。それじゃあ、説明するわ……といたいたいところだけど、私のアイデアもまだ説明できない段階じゃないのよ。放課後に説明するから、覚悟だけはして